

平成二十五年十月十一日 場所主義連続講演 第五回

「場所主義について 3」

諸君とのお話はこれで五回目になるんだそうですね。どうも、皆さんの顔を見ながら、いいかげんなことを五回しゃべったのかなという気がしています。これまでの話では、「和敬塾がどういうことを狙ってきたのか」「それはなぜなのか」「それはどういう効果をあらわしてきたのか」をお話ししながら、同時に「『場所』とはいったい何なのか」というお話をしてきたと思います。

「場所」を強調するために「民主主義」というものは完全に崩壊した」という話を何回もしましたが、これは最近の世相を見てみると、ますますそういう感じを強くもちます。アメリカは「民主主義の先進国」だといいますが、今のアメリカ議会のさまは何ですかね。あれが民主主義のなれの果てなわけです。ヨーロッパでも同じようなことがすでに起きています。二十一世紀、多数決で何かを決めるといふやり方は完全に崩壊しました。

私は前川製作所という会社で六十年間仕事をしていますが、この前川製作所は「場所」を経営しています。企業を経営し

ているんじゃないんです。「場所」を経営しているというのは、いったいどういうことなのか。

前川製作所はだいたい創業九十年です。この九十年間は、最初の三十年間、真ん中の三十年間、現在の三十年間に分けることができます。「企業の寿命は三十年」といいますが、あれはうまくいつているなど思いません。前川製作所でも三十年ごとに節目があります。和敬塾にもあります。どうも「場所」というものと、そういう枠というものは何か関係があるのだと感じます。

前川製作所が九十年間どういう「場所」を過ごしてきたかというと、まず最初の三十年間はメチャクチャです。無方向。生きのびるためにあらゆることをやりました。そのうちに「場所」ができてくるわけです。

「この集団は、この『場所』で生きる」ということがわかってくるのが、最初の三十年です。ほとんどの企業はこの三十年で潰れてしまします。赤ん坊の（時期は）死亡率が高いというのはまさにそれですね。最初の三十年で、生きる力を身につけると同時に生きる「場所」を知る。「場所」を深

公益財団法人和敬塾 理事長 前川 正雄

掘りしていくのが次の三十年です。

そう考えていくと、やはり三十年ごとに区切りがあるんだと思います。前川製作所はいま九十年目に入っていますので、四回目の区切りです。

和敬塾は、いま二回目の区切りを終えようとしています。それでは、和敬塾のこれまでの六十年間の「場所」はいったいどういう「場所」だったのか。次の六十年間は、いったいどういう「場所」を狙うのか。これは非常に大事なことです。と同時に、いま和敬塾の「場所」を考えることは、社会的意義があるように私は思います。先ほど申しあげたように、民主主義が崩壊してしまつたからです。おそらく、「民主主義はよいものである」という神話を、君たちは小さいときから頭に刷りこまれているわけでしょう。

私は終戦のとき中学生でした。したがって、戦前の雰囲気をよく知っています。そこから見ると、戦後にマッカーサーが言っていることはどうもおかしい。まあ、負けたんだからしょうがない。革命を起こすわけにはいかないから渋々つきあっている

すけども、どうもおかしいと思う気持ちはずつと募らせていたわけです。今、日本全体にこういう気風がみなぎりつつあるのを私は感じています。

では、戦後に入ってきたものをやめて、日本は何に帰るのか。これは、日本が古来もっている「場所主義」というものに帰っていくのです。過去四回にわたって同じことをお話ししていますが、そういう感じを私は非常に強くもっております。

和敬塾という「場所」は世界中に二つとない「場所」です。ここで六十年間、学生の寮をやってきたということが、二つとない「場所」なのです。時間的にも空間的にも、この「場所」はかけがえのない、東西古今唯一の「場所」なのです。その中でいったいどういうことをやっていくのか。これが和敬塾のミッションです。和敬塾は、日本という「場所」の中で期待されているものをつくっていく。これが日本的なやり方なのです。

まずはこんなところですが、私の話の中でよくわからないことがあったら、手を挙げてどんどん質問してください。何かないかい？ 質問しだすと、どんどん出てくるんだよ。聞きっぱなしが一番つまらないんだよ。自分の「場所」がどんどん小さくなってくるんです。質問すると「場所」がどんどん広がっていく。

前川製作所は雑談に重きをおいていません。雑談は「場所」を広げます。話してい

るうちに「あつ、俺たちは今こういう『場所』の話をしているんだな」と気づく。企業ですから、日々状態が変わります。まず、どういう「場所」に自分たちはいるのかという議論をする。五人なら五人、六人なら六人が、まずきちっと「自分たちはこの土俵で相撲をとるんだな」ということに気づかなくちゃいけない。その枠をつくることを「雑談」と称しているんですが、これができるれば話は半分解決したようなものです。

ですから、君たちもどんどん質問してもらいたい。そうとう刺激的なことを言っているはずですよ。フリートーキングだからあまり固くならないで、ひとつよろしくお願います。

●質問（乾寮三年・三島君）

僕は「場所主義」連続講演には初めて参加しますので、まだ「場所主義」のことがよくわかっていません。先ほどのお話では、「場所主義とは『場所』で期待されているものに従うこと」だとおっしゃいましたが、この認識は合っていますか。

■回答

今西錦司の「棲み分け」という考え方があります。今西錦司（いまにしきんじ、一九〇二年～一九九二年。日本の霊長類研究の創始者）という人は生物学者で、カゲロウの生態から「棲み分け」理論を考えつい

たわけです。カゲロウは一匹一匹みんなちがう世界に棲み分けている。それぞれの世界にカゲロウは一匹しかない。これを見て、なぜその世界にカゲロウは一匹しかないのか、と今西は考えたわけです。それでよく観察してみると、カゲロウは自分のおかれた環境にいちばん合ったかたちに自分を変えていく。そうやって変えたときに、その環境にいちばん合ったカゲロウがその場所を占める。これを「棲み分け」といったんだよね。

でも、その変化する方向は、「何でもかんでも自分が変わればよい」ということではない。自分の主体性の中で変化していかなければならない。自分の主体性と環境を合成させていく、それで「棲み分け」の世界をつくっていく。これが「棲み分け」ということなんです。

したがって和敬塾でも、塾生が何でもかんでも今の環境に適応すればいいということじゃない。おそろく寮によって、またはグループによって、適応の仕方がちがうと思うんですね。その中で自分の主体性に合った変化の仕方をしていく。

自分の主体性がないと、環境の変化が見えないんです。環境の変化が見えないと、自分のどこをどう変えたらいいかわからないんですね。

●質問（乾寮二年・大脇君）

「場所主義」が成功している具体的な事例

はありますか。

■ 回答

私が考えている中で「場所主義」が成功しているのは日本だけですね。では、どうして海外では「場所主義」ができあがってこないのか。たとえば、カゲロウならひとつの環境に「対一」、人間ならひとつの「場所」に何人かのチームがいて、仕事しているか遊んでいるか学んでいるかしているわけです。一匹一匹、一人ひとりの主体性というの全部ちがう。したがって「棲み分け」の方法も極端にいうと全部ちがう。ところが、それだと「場所」は成立しない。その一匹一匹、一人ひとりが、自分の主体性に沿った変化——進化ともいう——をして、その変化を全員で共有しなくちゃいけない。

日本人の場合は、「とにかく一緒にあって世界をつくっていこう」という風土があるんです。ところが欧米の連中は、自分がAと言ったら、Bと言う他人に対してAを徹底的に主張します。当然、AにはBの要素が入っていることもあります。にもかかわらず、Aは徹底的にBを攻撃するわけです。Bのほうも徹底的にAを攻撃する。それが今の民主主義の現状です。したがって、合意ができない。

それでどうなるかというと、「多数決でいきましよう」となる。非常にシンプルな、レベルの低い解決方法になるわけです。

ところが日本人の場合は、おのおのの主体性を充分理解したうえで合意できます。その方法が、これまで何度もお話ししているとおり「寄りあい」なんです。日本人の「寄りあい」が非常に大事なのはそこです。話しあいながら、相手の主体性を充分認めたいうえで「こことここは一緒だよな。じゃあ、ここはこれでいこうか」、こういう合意ができてきます。知恵の合成、経験の合成、これが「場所」のいちばん大きな特性です。それができるのは日本人しかない。

なぜ日本人がそうなったかというところ、やはり縄文時代からひとつの島国にずっと住んで生活してきたという文化的なDNAがあるからです。日本は一回も侵略されていないですから、日本の中で時間をかけて自分ももっているものを全部さらけだして話しても危険がないんです。したがって、日本は攻められると非常に弱いですよ。ね。日本の外交が非常に弱いのはそこです。話しあうことはできるが、防衛することはできない。

● 質問（乾寮二年・大脇君）

日本にしか「場所主義」はないとおっしゃいましたが、世界でもそういう動きはあると思います。マツキンゼーをはじめとする世界のいろいろな企業が、日本の「場所主義」というかコミュニティのあり方をもう一回見直そうとしています。コミュニティ・オブ・プラクティス、実践コミュニティ

イというものを、どんどん日本から学んで取り入れようという動きがあるんです。これから、「場所主義」というか、新しいコミュニティのあり方がどんどん世界に広がっていくと思うんですが、これをどう思われますか。

■ 回答

トヨタ生産方式というものが、アメリカで非常に盛んだったときがありました。今から四十年くらい前かな。「KAIZEN(改善)」「カンバン方式 (Just In Time)」「5S (整理、整頓、清掃、清潔、躰)」とかいう標語がアメリカの現場に貼ってあって、小集団活動なんかをやる。ところが、今もやっているところはない。なぜか。それが成立する「場所」がないからです。先ほど言った、ちがった人の意見を合成する「場所」がないんです。ちがった人の意見は、ちがったままどんどん行ってしまう。それで負けたら全部その通りになる。「それじゃダメだ」と、連中もさすがに感じはじめた。それで「場所」とか「無」とか「空」とかいうことを欧米でも言いだしています。私も何回かヨーロッパの大学に呼ばれて「場所」の話をしました。非常に興味をもっているんです。ただ、それも「日本食を食ってみたらうまくいったから行ってみよう」ぐらいのもので、身についていません。

前川製作所は世界中で展開しています

が、そうすると当然、現地人と日本人で共同体をつくらなくちゃいけない。日本人の共同体はどんどんつくれます。ところが、日本人の共同体に海外の連中を入れなければならぬ。そうすると、海外の連中を入れるときにいちばん問題になるのは、共同体に入りやすい人か入りにくい人かを見分けることなんです。なるべく入りやすい人を入れたほうがいい。先ほどのAとBでいうと、みんなAという考えもBという考えも両方もっている。そうすると、なるべく共同的、「場所」的なものを理解しやすい人を選ぶ。Aの中にBの要素が、Bの中にAの要素があるということを理解しやすいい人を選ぶ。それで、その人を日本人の共同体の中に入れて一緒に仕事していく。そのうち、日本人と同じ「場所」的な考えをもつようになる。「場所」的な判断をするようになる。「場所」的な行動をするようになる。私の経験だと、それができるようになるまでは三十年くらいかかる。ただし、そういう人はいることはいますし、できることはできますが、そういう人のいる現地企業は珍しいです。

ともかく、ルールで全部決めていくというのがアメリカの仕事ですね。ところが、「場所主義」にはルールはないんです。そこにいる人たちが「これが合意だな」と思ったものがルールになる。「場所」がちがえばルールがちがう。人がちがえばちがう。同じ人でも時間がちがえばちがう。全部ち

がうわけです。

そういう「場所主義」が、日本の社会の進め方なのです。日本の企業でも、「場所主義」で運営されているところは業績を上げています。反対に、アメリカ流のやり方を採用したところはおかしくなっている。それで欧米でも「どうも日本は何がちがったことをやっているぞ」と気がつきだしたんですね。

●質問（乾寮二年・大脇君）

先ほど、「場所」の中で合意が形成されるということをおっしゃいましたが、これまでの講演を聞いている限り、「場所」というよりもむしろ人の集まり、コミュニティを構成する人によっていろいろ変わってくるのかなと思います。たとえば、海外に日本人が行ってその土地で起業するという話がありました。それは「場所」とは全然関係ないのではないのでしょうか。海外、たとえばアメリカという「場所」と、起業して成功することとは何の関係もないでしょうか。

「場所」がどう関係しているのか、僕にはいまひとつわからないんです。

■回答

「場所」というのは、地理的な「場所」だけじゃないんだよ。その集団が持っている世界が「場所」なんです。その集団が歴史的にひきずっているようなものも「場所」。

これからの十年、二十年行く方向も「場所」。「場所」というものは、機械的に考えないで、もつと文化的に考えていく必要があると思います。このあたりが、まず欧米の連中には理解しにくいところなんです。

●質問（乾寮二年・大脇君）

「場所」というのは地理的なものだけではない、とおっしゃいましたが、地理的なことが関係する場合もあるのでしょうか。

■回答

当然、地理的なものが関係することもあります。和敬塾というのは、この「場所」、この地理にあるんだよね。和敬塾という「場所」は、六十年間の過去、空間、時間、すべてを引きずっているんです。これからの六十年間こうしようという将来のビジョンもある。

「場所」は地理的なものだけでなく、時間的、文化的なものを全部含んでいます。そこが非常に日本的なわけです。

●質問（乾寮二年・大脇君）

僕はそうではないと思います。たとえば、和敬塾が今あるこの土地ではなく、建物ごと別の土地に移動したとしても、六十年後のビジョンはあると思いますし、今まで受け継がれてきた伝統は残っていくと思います。それはむしろ、そこにいる人、構成員、和敬塾なら塾生が、そういった伝統を

引き継いでいくんだと思うんです。先ほどの話を聞いた限りでは、地理的な「場所」が関係しているとは思えません。

■ 回答

だいたい、生き物というのは「場所」の中で生きています。地理的な「場所」抜きにしては生き物は成立しない。カゲロウがひとつの地理的な「場所」に棲み分けているように、和敬塾の塾生もこの地理的な「場所」に住んでいる。企業も同じです。地理的なものは抜き差しできないんですよ。変えられないんです。地理的なものの中で「棲み分け」していくしかないんです。

● 質問（乾寮三年・三島君）

いま企業の話が出ましたが、わりと企業なんかは、「場所」、土地を変えてやっていくことは多いと思います。どうして抜き差しならないのでしょうか。

■ 回答

本社を変えて潰れる会社はいっぱいありますね。

● 質問（乾寮三年・三島君）

そうでしょうか。本社を変えて成功しているところもあると思います。

■ 回答

本社を変えたために問題が起こった会

社はいっぱいあります。あれは結局、「場所」の変え方をまちがえているんだろうと思いますね。

● 質問（乾寮三年・三島君）

なぜ、土地を変えたために潰れてしまったのでしょうか。たとえば、空港を東京の一等地に建てれば近隣トラブルで潰れるでしょうが、普通の企業が「場所」の選択をまちがえてつぶれるというのは考えにくいです。特に現代は、どこにいてもITで人とつながることができますし、どうして本社を移したことで潰れるなんてことがありえてしまうのでしょうか。

■ 回答

それは事実だからだね。もちろん、本社を移した会社が全部潰れるわけではないです。しかし潰れる会社はずいぶんある。

● 質問（乾寮三年・三島君）

たまたまではないのですか。

■ 回答

それはわからない。「場所」というのは複雑系だから。それ「だけ」が理由かどうかはわかりません。それが引き起こされる「場所」の変化を読みちがえたために、それが起こるということはあると思いますね。

● 質問（乾寮三年・三島君）

どういう事例があるのでしょうか。

■ 回答

業績を上げて本社を地方から丸の内に移したために潰れたとか、こういう話はずいぶんあります。やはり「場所」がその会社に馴染まないんだと思います。

● 質問（乾寮三年・三島君）

その土地に根づいてきたような老舗の企業が、東京とかに移ってきて潰れてしまふというようなことですか。

■ 回答

たとえば虎屋が丸の内に来たら、ちよつと「場所」的にはピンと来ないだろうね。そういうケースはあると思いますよ。

● 質問（南寮一年・堀川君）

「場所主義」における「場所」は、西田幾多郎の「場」という言葉から発想されたと聞いています。僕自身の勉強不足もあるのですが、西田哲学の「場」と、「場所主義」の「場」は具体的にどういうちがいがいいのか、教えていただきたいです。

■ 回答

実は私もよくわからないんですが、私の理解はこうです。「場」というものがある。「場」には時間

的なものも空間的なものもある。この「場」がいつぱいつながって、たとえば和敬塾の「場所」ができがっている。
西田の本を読んでみると、そんな単純な話ではないらしいのですが、そこから先は私にもちよっと理解できないんです。

●質問（南寮一年・堀川君）

正解じゃないかもしれないんですが、僕はこう思います。

今日のこの講演会のように意見を交換するところが「場」で、「場」の中の暗黙知のようなものが集積されたのが、「場所」という、時間を超えたものではないか。考えてみれば、文化というものもそういうものではないでしょうか。

■回答

今いったことは私の解釈だから信用しないほうがいいです。

●質問（南寮一年・堀川君）

僕たちのいる和敬塾という「場所」ですが、塾生それぞれにとってみれば、和敬塾だけがその人の「場所」ではないと思いません。そういうときに「場所主義」で和敬塾の方針を決めようとする、あまり効率的ではないと思うんです。仮に本当に「三日三晩話す」とすれば、和敬塾という「場所」に三日三晩没頭しなければいけないわけで、大学などに行かなければならないこと

を考えると、現実的な方法とは思えません。「場所主義」というものは、今の社会に生きている僕たちがやっていけるのでしょうか。

■回答

旧制高校はそれをやりました。旧制高校は三年間だから、三日三晩の話し合いも何百回もできますね。

三人の人間がいるとします。合意形成しなければいけない問題点があるとします。問題点は現象です。現象を見て「これは問題だな」と思っています。これを解決するには、現象の本質を見なければならぬ。たとえばの話ですが、一日目の話し合いはまだ何もわからない。二日目の話し合いで少し本質をかする。三日目になってようやく本質が出てくる。この場合、一日目にはまったくわからないわけです。三日目に来たとき、初めて「ようし！ わかった」「そういうことか！」「それとこれは全部関係してるぞ！」と気づく。こういうものが「場所主義」の合意なんです。

●質問（南寮一年・堀川君）

時間をかけることによって、初めて本質が見えてくるということですか。

■回答

時間はどうしてもかかります。

●質問（南寮一年・堀川君）

人数が増えれば増えるほど、合意形成には時間がかかると思います。たとえば、四人になれば三日じゃなくて四日かかるかもしれない、五人になれば五日かかるかもしれない。和敬塾もずいぶん大きな集団になってきましたが、そういう問題を解決していく具体的な方策はあるのでしょうか。

■回答

さっき言ったように、「場」が無数につながって和敬塾という「場所」をつくっています。まず小さい単位の「場」における合意形成で三日かける。ひとつの「場」がせいぜい五人から十人だとすると、それぞれの「場」の代表者が集まって、また三日かけて合意形成する。そうすると三十人の合意ができる。これが日本的な合意、「場所」的な合意です。民主主義とは似ても似つかないよね。こつちのほうがずっとレベルが高いでしょう。それが日本の社会と欧米社会との差になってくるわけです。

結局、どこまで深く自分の現状を掘り下げられるか、それをどれだけ共有して合意できるかなんです。この「現象」というものは、家庭にもあるし企業にもあるし、学校にもあるし、遊びの集団にもあります。現象の本質をきっちり捕まえて、新しい世界、新しい「場所」をつくっていくのがリーダーなんですね。それができないとどうなるかというと、多数決か独裁か、とい

うことになる。そうになると、社会の想像力が衰え、クリエイティブティが出てこなくなる。機械的なものになる。

したがって、最近ITが非常に発達しているというけども、似ても似つかないコミュニケーションなんだね。

●質問（東寮三年・松下君）

「場所」の事例というのは、和敬塾であったり前川製作所であったり、国家という単位と比べたら小さい集団だと思います。確かに五人から十人の意思決定を積み重ねることで、和敬塾六百人の合意を形成することは可能かと思うんですが、日本というレベルでの合意となるとむずかしいのではないのでしょうか。

■回答

いわゆる「国体」とは、国の合意の仕方のことです。同じものは企業にもあるし、家族にもあるし和敬塾にもあるし学校にもあるし、あらゆるものにあるわけです。国でいえば「国体」なんです。最近はずっかり聞かなくなった言葉ですがね。

欧米でいえば神です。絶対神です。これは動きません。神に対して「私は人を殺しません」とか契約する。これが聖書ですね。神と自分と、一対一で対峙します。「場」の集合のようなものではない。この契約は、もう何千年来、動いていません。

したがって、何千年来ヨーロッパが殺し

あいをやっているのは、動かないからなんです。私は十二年間ヨーロッパにいますが、「こいつら本当に何千年来こういうばかげたことをやっているんだな」と思いますね。神との契約は変えられないんです。

一方、日本は神仏混交ということをやりました。キリスト教とイスラム教が合体するようなものです。これも「場」と「場」がつながったということなんです。神と仏というものがどこかでラップする、その世界をつくるう、というのが神仏混交です。そういうことができる文化的なDNAが、日本の国体にはあります。

●質問（北寮二年・山崎君）

先ほど、前川製作所では現地の人の中から「場所」的思考ができる人を選ぶ、というお話がありました。

おそらく、現地の人たちの「場所」的思考は、できるとしても弱いのではないかと思いますが、前川製作所では「場所」的思考を育てるために従業員にどのようなことを行っているのでしょうか。

■回答

それはもう、日本人の中に外国人を二人とか五人とか入れて、日本人と外国人が一体になった共同体をつくっていくんです。それで仕事をしていく。一年目はいろいろとぎくしゃくする。二年目はちよつと解決する。三年目はもうちよつと解決する。四

年、五年と経つうちに徐々に共同体ができてくる。やはり、ひとつの共同体ができあがってくるには最低十年はかかります。十年かけると、お互いの考えていることが通じるようになる。その間、現地の間人が日本に研修に行ったり、日本からも海外に見学に行ったりして、共同体としての活動をやっていきます。それ以外に方法はありません。

実はそれは和敬塾の現場でもやっていることなんです。だから、和敬塾の現場は大事です。和敬塾の現場でもって、ひとつの共同体の合意をつくる力をつけていく。

●質問（北寮二年・山崎君）

「場所」的思考ができる人たちの中で慣れさせることで、「場所」的思考を育てていく、ということでしょうか。

■回答

そうです。それで一緒に現場で仕事をししていく。一緒に現場で共通の現象を見ていく。

●質問（東寮三年・新井川君）

先ほどから、日本人以外には「場所主義」は理解しづらいとおっしゃいますが、それは言い換えると、全世界の人口六十億人中でたった一億人しか「場所主義」を理解できないということだと思いませんか。

ということは、世界という「場所」は、す

でに「場所主義」が馴染まない「場所」になつていないかと思ふのですが、そんな中で日本はどういうふうになつていけばいいのでしょうか。

■回答

たとえば、AとBという人が、AとBという人がつた意見をもっている。海外の場合、AはAだけしか理解しないかというところではない。AとBはお互いを理解したうえで、AとBを主張して相手を言い負かそうとする。一方、お互いを理解したうえで両方を合成して、こうというのが日本の「場所主義」です。だから、日本人の共同体に海外の連中を入れると、さつき言ったように五年、十年経つてそういうかたちになつてくるわけです。

それが日本型のグローバリズムです。しかし、海外のグローバリズムというのは、ルールが決まっています、それをそのまま頭からやっていくわけです。その代わり、自分の Job Description (職務記述書) というものがある、それをきっちり覚えてくる。ただし、それ以外のことは一切やらない。「場所」なんて関係ない。「俺はこれで給料をもらっているんだ」。したがって、自分の仕事が終わったらさっさと帰る。アメリカ、ヨーロッパで事業をスタートすると、最初は「今日はひと仕事終えたから一杯飲もうか」なんて連中は一人もいないです。日本人ならまずそうするんですがね。

しばらく時間が経つて初めて「一緒に飲みに行こう」とか「食いに行こう」とかいう話になる。そうなつてきたら、だいたい共同体ができあがつてきている。これは和敬塾の現場でやっていることと同じなんです。

それから、Aという人、Bという人、Cという人は、みんなひとつの現象に対してちがつたものを見ているわけです。Aはここを見ている、Bはそこを見ている、Cはあそこを見ている。それぞれが見ているものを合成したときに実体が出てくる。欧米では、たとえばこの中でAという人がトップだとすると、Aの考えだけで進めてしまふ。BとCは切つてしまふ。日本の場合は、AとBとCを全部まとめようとする。本質を捕まえようとする。これは全然ちがいますよね。合成しようとする、チームワークができてくる。AとBとCのあいだに「場所」ができてくる。この三人の中でひとつの問題を解決することに、AとBとCの「場所」が深まつていく。これができるのが共同体のリーダーなんです。

技術的なことは大した問題じゃないと私は思います。技術は進んだ、進んだというけれど、技術なんてものは会社で三年も五年も仕事していればバカでも覚えるわけです。そうじゃない、こういうリーダーシップをとつていく、AとBとCに新しい世界を提供していく、これがリーダーなんです。より深くなつた「場所」を見せる、

これまでとちがつた世界を見せる、これがリーダーです。リーダーは共同体の中からしか出てきません。

●質問 (乾寮一年・添田君)

「場所主義」は、同じ「場」を共有する人間がそれぞれの知恵を出しあつて合意を形成することだと僕は解釈しています。そうすると「場所主義」では、「場所」を共有する人たち——日本だったら日本という「場所」を共有する人たち、和敬塾だったら和敬塾という「場所」を共有する塾生たち——の意見は反映されるけれども、外の人たちの意見が反映されないような感じを僕はもっています。外の人の意見はあまり関係ないのかもしれないですが、傍目八目(おかめはちもく)という言葉もあるように、外からでしか見えないものもあると思います。

「場所主義」において外の人の意見を考慮するということについて、理事長はいかがお考えですか。

■回答

AとBとCという人が、現象を見て問題点を考えていく。これはひとつの「場所」なわけです。Aの「場所」、Bの「場所」、Cの「場所」、それぞれ別々の「場所」から同じものを見る。そのときに感じたものを合成しようというのが「場所主義」です。それで問題解決していく。AとBとCの異

なった意見をひとつにする、それがいくつも集まって、日本の共同体、日本という国ができあがっている。だから、日本の中の合意は非常に早いです。なぜか。「場所主義」だから。

私が心配しているのは、戦後六十年間、この習慣が少しおろそかになってきていることです。それをもう一度立ちあげようというのが和敬塾なんです。

●質問（乾寮一年・添田君）

つまり、ひとつひとつの「場所」が「場所」同士で合意を形成し、それがまとまってより大きな範囲の合意形成になる。そう考えてよろしいでしょうか。

■回答

宮本常一（みやもとつねいち、一九〇七年〜一九八一年）という人がいました。もう亡くなりましたが、「寄りあい」の本を何冊も書いています。宮本常一は知っていますか？（添田君「存じあげないです」）民俗学者で、日本の民俗学をリードした人です。その人がいろいろな地域に行つて、日本の「寄りあい」がどういう合意形成をしているかという本を書いています（『忘れられた日本人』一九六〇年刊）。

それを読んでいると、彼が終戦後に対馬に行ったことが書いてあります。ある村で水争いが起きた。この問題を片づけるとき、関係者が全員集まってくる。どういふふう

にするのかなと思つて見ていると、神社のような集会場に集まって、その中で五、六人がひとつの組になつて話をしている。外の土間みたいなところで、また別の組が話をしていく。ちがうところに座つて、また五、六人が話をしていく。それが何組か集まって、また寄り集まってくる。こういうふうにして三日経つと、合意ができあがってくる。

まさにこれなんです。

●質問（乾寮三年・三島君）

これからも、この和敬塾という「場所」は「場所主義」に基づいて運営されていくのでしょうか。

■回答

実態がそうなっています。それで六十年間やってきている。次の六十年間もこれで行くわけです。

●質問（東寮一年・太田君）

天皇という存在についてですが、民主主義においては「君主イコール『悪』」という感じに考えられています。「場所主義」の中では、天皇はどういう存在として考えられているのでしょうか。

■回答

「場所」のリーダーが天皇なんですよ。

●質問（東寮一年・太田君）
やはりそうなんですね。

■回答

天皇というものは、何かつくられたようなものではなく、さっき言ったようなかたちで地元ごとに形成した合意の総合体なんです。私は田舎が奈良なんです。奈良では「天皇はん」と呼ぶんですよ。そこらへんにいるおやじさんみたいに。天皇は身近なものなんです。何か上にいる、君臨しているようなものではないんです。共同体のリーダーはそういうものなんだ。

●質問（東寮一年・太田君）

理事長の『再起日本！』という本（ダイヤモンド社、二〇一三年刊）で、「寄りあい」などの会議で「ちよつとこのへんでやめましょうか」と「場」の仕切りをするのが天皇の役割だと書かれていましたね。

■回答

そんなこと書いたかなあ（笑）。いずれにしても「寄りあい」のリーダーなんです。「寄りあい」ではひとりだけでリーダーが出てきます。君たち塾生の共同体でも、ひとりだけでリーダーが出てくるでしょう。自然に出てきた日本のリーダーが天皇なんです。

●質問（東寮一年・太田君）

西洋の君主とはちがいますか。

■ 回答

まるっきり、発生から何から全然ちがいます。

● 質問（西寮二年・林原君）

「場所主義」ではお互いに意見交換することとで合意を形成するという話ですが、世間にはたとえば右翼や左翼のように、どうしようもなく意見が離れている集団もあると思います。「場所」が大きくなれば、そういう人々を「場所」に含むこともありうると思いますが、憎みあつていたり意見が正反対だったりする人がいると、決着がつかないと思います。その場合も「場所主義」は合意を形成できるのでしょうか。そんなときは、多数決で決めてしまえばいい、と僕は思うのですが。

■ 回答

私が学校を出たのは昭和三十年です。そこから六十年以上仕事しているわけですが、その当時から見ると、日本はどんどんどんどん右派と左派が一体になっていきます。この数年間、非常にそれがはつきり出てきました。

昔は春闘というものがありません。今、春闘なんてないでしょう。春闘は知っている？（林原君「知らないです」）知らないか（笑）。春闘というのは何かというと、

春になると民間でも官公庁でもストライキをやるわけです。国鉄は止まるし、えらい騒ぎになります。ところが、今はストライキをやっている会社はないでしょう。日教組もずいぶん潰れましたね。労働組合、日教組、それから社会党。社会党（現・社会民主党）はあるんだかないんだかわからなくなっちゃったな。共産党は少し元気だけれども。

日本の場合、昔からああいふ異端はだいたい五%なんです。キリシタンも五%しか増えなかった。五%までは正常の範囲なんです。ところが、昭和三十年代、四十年代というのは、右派と左派にどんどん分かれてしまつて、しよつちゆう大騒動が起つていた。東宝争議や三井三池争議、トヨタでもすごいストライキがありました。今はそんなことは起こりません。私から見ると、右派と左派の距離がなくなつてきます。結局、「場所」の中で異なつた意見をひとつにする、ということをやっているからです。

ここにイデオロギーが入っていたらダメです。イデオロギーが入っていたら実体が見えません。イデオロギーを通して実体を見ると、完全に見誤ります。だからまず、イデオロギーを切る。そういう状態に日本はなつていません。

だから私は、日本は先進国化しているのだと考えています。一方、アメリカ、ヨーロッパを見ていると、どんどんどんどん右派

と左派が分かれている。その中でもって内乱が起きている。もう一度、アメリカで南北戦争が起るかもしれない（笑）。そのぐらい分かれていますね。

● 司会

それでは、予定の時間になりましたので、これで終了いたします。前川理事長、貴重なお話ありがとうございました。（拍手）

※場所主義についての刊行物

場所主義連続講演

- 第一回 塾誌和敬第九十号
- 第二回 別冊和敬第四十一号
- 第三回 別冊和敬第四十二号
- 第四回 別冊和敬第四十三号

ご興味をお持ちの方は、合わせてお読みください。